報　告

山口福祉文化大学留学生に関する実態調査報告

京　祥太郎*1

キーワード：留学生、実態調査、質問紙調査

１　はじめに

平成24年度の日本に留学している留学生総数(高等教育機関在籍者数）は、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が公表したデータによると、東日本大震災の影響もあって過去最高だった平成 22 年度の141,774 人より 4,018 人減少し 137,756 人であった。そのうち私費留学生数が 125,124 人にのぼり、留学生数全体の約 90%を占めている [1)]。

私費外国人留学生の日本留学のルートとしては、まず､日本語学校等の予備教育機関で 1～2 年集中的に日本語を学習し、高等教育機関（大学、専門学校等）へ進学するのが一般的である。大学、専門学校を卒業後の進路としては、日本国内での進学、日本国内での就職､日本国内での就職活動､帰国などがあげられるが、昨今、特に専門学校を卒業した後の進路としては日本国内での進学が多い傾向にあることが JASSO による外国人学生進路状況調査結果で報告されている [2)] 。本学における私費外国人留学生も、日本語学校を卒業して入学してくる者や専門学校を卒業して入学してくる者などが在籍している。これまでも多くの学校で留学生の実態調査は行われているが、今回筆者が調べた範囲では、私費外国人留学生における日本での滞在年数の違いによる調査報告は見当たらなかった。

そこで、今後の留学生支援の基礎資料にするため、本学の東京サテライト教室の留学生の本学に入学した動機や日本留学の目的、日本語の環境や勉強に関する実態調査を行い､日本での滞在が 1～2 年で入学する日本語学校卒業生と日本での滞在が 3～4 年で入学する専門学校卒業生とを比較することで滞在年数による差があるかを分析した。以下、調査結果についての報告である。

２　調査方法

調査は2013年7月下旬に本学の東京サテライト教室の留学生 2 年生を対象に、2 年生の「基礎ゼミⅢ」の時間に無記名での質問紙調査を行った。調査対象者 89 名中 70 名から回答を得られ､回答率は 78%であった。70 名のうち日本語学校卒業生は 23 名、専門学校卒業生は 44 名、その他 3 名であった。

３　調査結果

３－１　基本的事項について

基本的事項については、「出身国・地域」「大学進学の理由」「本学を知った方法」「本学を選んだ理由」などを質問した。今回の調査に回答を寄せた留学生は、次のような「出身国・地域」であった。

表 1　出身国・地域（n＝70）

出身国・地域	合計
中国	65(92.8)
ベトナム	2(2.9)
ネパール	1(1.4)
その他	2(2.9)
合計	70(100)

注：単位は人、（　）内は構成比%を示す。
以下、同様に表記。

*1　山口福祉文化大学　ライフデザイン学部

「年齢」を集計した結果は、表2のようになり、χ二乗検定を行ったところ、日本語学校卒業生と専門学校卒業生とに有意差が見られた（χ^2（1）＝4.219, p<.05）。日本語学校卒業生の方が専門学校生に比べ「24歳以下」の学生が多いということが分かった。

表2　出身校別年齢（n＝67）

実測値	日本語学校卒	専門学校卒	合計
24歳以下	17	21	38
25歳以上	6	23	29
合計	23	44	67

注：単位は人を示す。以下、同様に表記。

「大学進学の理由」を集計した結果は、表3にようになり、「日本で就職」が一番多く42.9%、次いで「ビザ取得」27.1%、「学位取得」18.6%という順であった。

表3　大学進学の理由（n＝70）

理由	合計
学位取得	13(18.6)
ビザ取得	19(27.1)
日本で就職	30(42.9)
母国で就職	2(2.9)
大学院進学	4(5.7)
その他	2(2.9)

「本学を知った方法」を集計した結果は、表4にようになり、「友達や先輩の紹介」が一番多く68.5%、次いで「先生の紹介」22.8%、「インターネット」8.5%という順であった。

表4　本学を知った方法
（n＝70　複数回答設問）

方法	合計
インターネット	6(8.5)
友達や先輩の紹介	48(68.5)
先生の紹介	16(22.8)
近所	1(1.4)
広告	1(1.4)
その他	0(0.0)

「本学を知った方法」を日本語学校卒業生と専門学校卒業生とに差があるかについてχ二乗検定を行ったところ、日本語学校卒業生と専門学校卒業生とに有意差が見られた（χ^2（1）＝5.763, p<.05）。日本語学校卒業生の方が専門学校卒業生より「先生の紹介」が多い傾向にあることが分かった。

表5　出身校別本学を知った方法（n＝61）

実測値	日本語学校卒	専門学校卒	合計
友達・先輩の紹介	12	34	46
先生の紹介	9	6	15
合計	21	40	61

「本学を選んだ理由」を集計した結果は、表6のようになり、「学費が安い」が一番多く81.4%、次いで「交通便利」と「友達や先輩の勧め」が同率で32.8%であった。

「先輩や友達がいる」も31.4%であり、「学費が安い」「交通が便利」「友達や先輩の勧め」「先輩や友達がいる」というのが本学を選んだ大きな理由になっていることが明らかになった。

表６　本学を選んだ理由

（ｎ＝70　複数回答設問）

理由	合計
学費が安い	57(81.4)
交通が便利	23(32.8)
友達や先輩の勧め	23(32.8)
家族の勧め	0(0.0)
先生の勧め	5(7.1)
先輩や友達がいる	22(31.4)
学びたい専門分野がある	9(12.9)
日本語の授業がある	6(8.6)
推薦がもらえた	5(7.1)
日本語の試験結果が不要	3(4.3)
その他	0(0.0)

３－２　日本語能力について

日本語能力については、「日常会話」「講義を聞く」「資料などを読む」「発表や意見を言う」「レポートを書く」の４技能について、自己評価としてどのように思っているかを質問した。

「日常会話」を集計した結果は、表７のようになり、「だいたい分かる」が一番多く 71.4%、次いで「分かる」25.8%、「あまり分からない」2.8%、「分からない」0%という順であった。

「日常会話」については、多くの留学生が日本滞在３年以上であることから、「だいたい分かる」「分かる」で９割以上の回答を得た。

表７　日常会話（ｎ＝70）

レベル	合計
分かる	18(25.8)
だいたい分かる	50(71.4)
あまり分からない	2(2.8)
分からない	0(0.0)

「講義を聞く」を集計した結果は、表８のようになり、「だいたい聞ける」が一番多く 71.9%、次いで「聞ける」17.1%、「あまり聞けない」1.0%、「聞けない」0%という順であった。

「講義を聞く」については、「だいたい聞ける」「聞ける」で９割以上にのぼり、多くの学生が講義を聞くことについては概ね問題ないと思っていることが明らかになった。

表８　講義を聞く（ｎ＝70）

レベル	合計
聞ける	12(17.1)
だいたい聞ける	51(71.9)
あまり聞けない	7(1.0)
聞けない	0(0.0)

「資料などを読む」を集計した結果は、表９にようになり、「だいたい読める」が一番多く 62.9%、次いで「あまり読めない」24.3%、「読める」10.0%、「読めない」2.8%という順であった。

「資料などを読む」については、「だいたい読める」「読める」が７割強いることが明らかになった。しかし一方で、日本語で資料を読む力が不足していると思っている学生も３割近くいることも分かった。

表９　資料などを読む（ｎ＝70）

レベル	合計
読める	7(10.0)
だいたい読める	44(62.9)
あまり読めない	17(24.3)
読めない	2(2.8)

「資料などを読む」を日本語学校卒業生と専門学校卒業生とに差があるかχ二乗検定を行ったところ、日本語学校卒業生と専門学校卒業生とに有意差が見られ

た（χ^2（1）＝4.443, p<.05)。この結果から、日本語学校卒業生の方が専門学校卒業生より「読める」「だいたい読める」と思っている学生が多い傾向にあることが分かった。

表 10　出身校別資料などを読む（n＝67）

実測値	日本語学校卒	専門学校卒	合計
読める・だいたい	21	30	51
あまり・読めない	2	14	16
合計	23	44	67

「発表や意見を言う」を集計した結果は、表 11 のようになり、「だいたい話せる」が一番多く 61.4%、次いで「あまり話せない」25.8%、「話せる」11.4%、「話せない」1.4%という順であった。

「発表や意見を言う」については、「だいたい話せる」「話せる」で 7 割強いることが明らかになった。しかし一方で、日本語でコミュニケーションがとれないと思っている学生も 3 割弱いることが分かった。

表 11　発表や意見を言う（n＝70）

レベル	合計
話せる	8(11.4)
だいたい話せる	43(61.4)
あまり話せない	18(25.8)
話せない	1(1.4)

「レポートを書く」を集計した結果は、表 12 のようになり、「だいたい書ける」が一番多く 48.6%、次いで「あまり書けない」34.3%、「書ける」15.7%、「書けない」1.4%という順であった。

「レポートを書く」については、「だいたい書ける」「書ける」で 6 割強しかいないことが明らかになった。「あまり書けない」も 3 割強おり、日本語で書くことに苦労している様子がうかがえる。

表 12　レポートを書く（n＝70）

レベル	合計
書ける	11(15.7)
だいたい書ける	34(48.6)
あまり書けない	24(34.3)
書けない	1(1.4)

３－３　本学での勉強について

本学での勉強については、「施設や設備」「科目や専攻」「講義やゼミなど理解できるか」について質問した。

「施設や設備」を集計した結果は、表 13 のようになり、「普通」が一番多く 48.6%、次いで「満足」18.6%、「少し不満」「不満」が同率で 15.7%、最後に「とても満足」1.4%という順だった。

主な不満理由として自由回答してもらった結果、「第 1 教室と第 2 教室とに距離がある」「設備が乏しい（図書館、食堂、体育館など）」などという理由があげられた。

表 13　施設や設備（n＝70）

満足度	合計
とても満足	11(15.7)
満足	34(48.6)
普通	24(34.3)
少し不満	1(1.4)
不満	1(1.4)

「科目や専攻」を集計した結果は、表 14 のようになり、「普通」が一番多く 72.9%、次いで「満足」20.0%、「不満」4.3%、「とても満足」と「少し不満」が同率で 1.4%という順だった。主な不満理由として自由回答してもらった結果、「選択できる科目が少ない」などという理由があげられた。

表 14　科目や専攻（n＝70）

満足度	合計
とても満足	1(1.4)
満足	14(20.0)
普通	51(72.9)
少し不満	1(1.4)
不満	3(4.3)

「講義やゼミなど理解できるか」を集計した結果は、表 15 のようになり、「理解できない科目がある」が一番多く 60.0%、次いで「どの科目も良く理解できる」18.6%、「理解できない科目がたくさんある」15.7%、「未記入」4.3%、「全部の科目が理解できない」0%という順だった。

主な理解できない理由として自由回答してもらった結果、「板書が読めない授業がある」「教え方が良くない授業がある」などのコメントがよせられた。

表 15　講義やゼミなど理解できるか（n＝70）

レベル	合計
どの科目も良く理解できる	6(8.5)
理解できない科目が少しある	48(68.5)
理解できない科目が沢山ある	16(22.8)
全部の科目が理解できない	1(1.4)
未記入	1(1.4)

3－4 その他

その他として、「卒業後の進路」を質問した。「卒業後の進路」を集計した結果は、表 16 のようになり、「日本で就職」が一番多く 44.3%、次いで「未定」37.1%、「その他」7.1%、「帰国して就職」5.7%、「日本で進学」4.3%、「帰国して進学」1.4%という順だった。

「日本で就職」を希望している学生が 4 割強、「未定」の学生が 4 割弱という結果だった。今回は 2 年生対象の調査でもあり、卒業後の進路については彼らにとってはまだ先のことで、漠然としか考えていないのかもしれない。3 年生になると、もう少し将来設計も明確になるかもしれない。

表 16　卒業後の進路（n＝70）

進路	合計
帰国して就職	4(5.7)
帰国して進学	1(1.4)
日本で就職	31(44.3)
日本で進学	3(4.3)
未定	26(37.1)
その他	5(7.1)

4　まとめ

調査の結果から、本学の留学生は 20 代が中心で、特に専門学校卒業して入学してくる留学生は 20 代後半の学生が多い傾向であることが分かった。また、本学を知った方法としては、専門学校卒の学生と日本語学校卒の学生とに違いが見ら、特に専門学校卒の学生に「口コミ」が多いことが明らかになった。今後は、中国からの留学生が減ってきている状況であることも考えると、中国人ネットワークにおける「口コミ」に頼る以外の方法も検討する必要があるだろう。

留学生の進学先を選んだ理由については、調査分析方法の違いにもよるが、金久保他（2004）によると筑波女子大学を選んだ理由としての上位 3 つは「先生等の勧め」「専門分野」「進学説明会」という回答であったと報告されている [3)]。また、三枝（2005）によると文教大学の留学生別科で行った進路決定に関する調査で、志望校を選ぶ際に最も重視したこととしての上位 3 つは「勉強したい学科・学部か」「将来性があるか、就職に有利か」「学費・学校の場所」であったことが報告されている [4)]。今回の調査では、本学の留学生は勉強したい分野があることが選択理由になっている学生が日本語学校卒業生、専門学校卒業生ともに多くなかった。今後は、専門分野についてのアピールが今まで

以上に望まれる。

日本語力については、日本での滞在年数が長いからといってアカデミックな日本語を習得しているとは言えず、特に「読み書き」に関しては苦労している様子がうかがえた。今後はベトナムなどの非漢字圏の留学生が多くなると予想され、より一層の配慮が必要になってくると推測される。

卒業後の進路については、日本での就職を希望しているものが多い。「留学生 30 万人計画」でも述べられている「高度人材としての留学生」を社会に輩出する役割が大学に求められている現在、留学生への教育について大学は責任もって対応する必要がある [5)]。日本人にとってだけではなく、留学生にとっても魅力ある大学であるよう努力することが大切であり、少しでも多くの留学生が「日本に留学して良かった」と思えるような教育が提供できるようでなければならないだろう。

以上、調査の結果をもとに報告を行ったが、どのような項目で滞在年数による違いがあるのかを更に詳しく調査を行う必要があり、また、滞在年数の比較だけではなく日本語力など総合しての分析も必要であるだろう。このような点を考えると今回の調査だけでは不十分であり今後の課題としたい。今後も様々な面で私費外国人留学生の実態についての調査を行い、私費外国人留学生にとってよりよい留学環境とは何か、留学支援についての考察を深めていきたい。

［引用・参考文献］

1) 独立行政法人日本学生支援機構；平成 24 年度外国人留学生在籍状況調査, http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data12.pdf （2013.11.13）

2) 独立行政法人日本学生支援機構；平成 23 年度外国人留学生進路状況調査結果, http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/degrees11.pdf (2013.11.13)

3) 金久保紀子・亀田千里；筑波女子大学留学生実態調査報告, 東京家政学院筑波女子大学紀要第 8 集, 2004

4) 三枝優子；留学生の進路決定に関する調査報告, 文教大学文学部紀要 19(1), 2005

5) 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省；「留学生 30 万人計画」骨子, http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.pdf (2013.11.13)